

『敗戦真相記』を読む/敗因-4「科学的遅滞/科学兵器」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも残り12回。「軍事学/地政学」シリーズの6回目は、永野氏が挙げる敗因の「真因」にあたる、当時の我が国の「科学的遅滞」がテーマ。今回はその前半として「科学兵器」を取り上げ、その研究開発から製造に至る過程を眺めつつ、今日的な教訓を考えます。

その1:「科学兵器」の進歩

永野氏は講演前半の山場で、太平洋戦争の勝敗を決した「英米の科学」に焦点を当て、それを二つに分けて考える必要性を説きます。その一つは「科学兵器」というリアルな側面、もう一つは「マネジメントの科学性」という見えない領域です。

今回の主題「科学兵器」は、先立つ第一次世界大戦において、戦車、毒ガス、飛行機などの形で登場し、戦争の概念や規模を根本的に変えただけでなく、もたらす災禍を爆発的に増大させました。

しかし参戦によって死傷者が出た海軍はともかく、一部の軍人の観戦に止まった我が陸軍において、その変化を軍全体が実感する場合は、20年後のノモンハン事件に待たねばなりませんでした。

その2:「第二次世界大戦」の事例

さて第二次世界大戦における兵器として、まず氏が話題にしたのは「レーダー」(英国:ラジオロケーター)。すでに各国で開発され、開戦時の性能はほぼ同等でしたが、的確かつ効率的な「防御の必需兵器」という価値をいち早く見抜き、戦時中ひたすらその改良と量産に努めたのが英米独。一方、いかなる場面でも「攻撃は最大の防御なり」を妄信し、その改良を後回しにした日本。実際その価値に気づいたのは、攻撃力の過半を失った後でした。

次に氏が挙げた事例は「原爆」。レーダー同様、ほとんどの参戦国がその可能性に気づき、研究は行っていたものの、戦時中に開発、製造にまで至ったのは、破格の投資を行った英米連合のみ。対ドイツの恐れは外れだったものの、対日戦の早期終結に向け、究極の「科学兵器」として試用され、広島、長崎で想定以上の惨劇を引き起こしました。

以上のように、大戦は新たな「兵器」だけでなく、兵站に関わる食・衣・住の「製品」、「システム」を生み、それらが後にさまざま転用され、産業や私たちの生活を良くも悪くも変化させてきたのです。

☞参照 『三々な経営』

3-11 「イノベーション」の分類

☞参照 『続・三々な経営』

Z-39 三字熟語⑨軍官民

☞参照 「四字熟語」で考える経営戦略

Y-10 「経営戦略」を考える・その1

その3:「科学兵器」からの「教訓」

さて太平洋戦争を「科学兵器」の側面から振り返るとき、「米国の物量作戦に敗れた」という総括ほど短絡的なものはありません。それは一側面に過ぎず、得られる「教訓」の幅を狭めてしまいます。

因みに氏が挙げた「レーダー」の事例は、いまなお「教訓」の宝庫。まず一部の要素技術は世界的な水準にありながら、その製品化において後れをとってしまったこと。またそれを量産できないばかりか、システムとして活用する発想がなかったことなど、とても昔の話だとは思えません。また「原爆」に関しても同様で、自分たちのレベルでしか実現可能性を予測できなかったことなど、その多くがいまの私たちにつながる問題です。

しかしいずれにせよ、「科学兵器」とは「戦争目的」を果たすための「手段」。このシリーズで取り上げてきたように、「誤った目標」「慢心による情報軽視」「指導者の独善」の3つが揃えば、もはや最新の「科学兵器」など望むべくもありません。

またノモンハン(1939)でようやくソ連とのその差を実感しながら、報告書の結論が「精神力強化」では、当時の「科学無き者の最後」という米国ニュース映画の表題に異議を唱えようもありません。

そして講演は、後世の同胞に向け氏が最も強調したかった、「科学的マネジメント」という核心にいよいよ突入します。(次回へ!)

2022年10月24日 実空